

現代短歌分類辭典

第三十三卷

津 端 修 編 纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辭典

第三十三卷

現代短歌分類辞典

33

昭和四十八年四月三十日発行 定価六〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 修

〒164

東京都中野区上高田二丁目九の一六

発行所

津 端 修

振替 東京 六七三四一番
電話 三八七局八四二九番

凡 例

- 一、明治、大正、昭和三代に詠まれた主要な歌三十八万四千首を分類した。
- 一、分類の基準は単語を中心とし、単語には、品詞名をつけた。
- 一、単語の排列は、五十音順に従った。
- 一、歌は初版本に拠る方針をとった。
- 一、序文集は第十二巻に掲載した。
- 一、歌の下にある記号は歌集名の略符号である。

あめ【名詞】〔雨〕

雨降りて道にみみずの這へるとき我がうつせ身は翳もちそめぬ①

池原 檣雄

雨降りて水足りたれば妻が辺に今夜はいねて安く寝るかも

結城哀草果

雨ふりて水のいきほふ山川に青き胡桃の実がもまれをり③

結城哀草果

雨降りて水まさりたる背戸の田に蛙の群れて鳴く夜ごろかな

結城哀草果

雨降りて燃えなづむ庭燎おびただしき煙ながらも爆ぜつつし燃ゆ②

神原 克重

雨ふりてやうやく青きこの里に咲きゐるものは桃の初花⑤

尾山篤二郎

雨降りて山の消ゆるに驚かず不思議を多くつくる若人⑭

與謝野晶子

雨ふりて山ふかければ谷みづのまだ濁らぬを汲みて茶をにる⑤

中村 憲吉

雨ふりてややにあふるる沢水に茎浸り咲くりんだうの花①

加藤 洵綾

雨ふりて雪の解くれば幾すぢも黒部の山の涙するかな⑭

與謝野 寛

雨降りて夕べ小暗き牛小屋につめたく牛の鼻光りゐる③

木村たか子

雨

雨降りて若葉の榛のそよぐ町山の底にていかづちの鳴る②①

雨降りて井の水うすく濁るさへうら^な和ましく住み馴れむとす③

雨降りて小暗き裏の廊下には今日は朝より電気つきをり

雨降りて小田を休める囲炉裏べに^{うつぱり}梁の煤おちてくづれず③

雨降りて居れば我が窓の薄明に鴉啼きゆく声も聞こえず⑫

雨降りながら明るくなりし山路にうぐひすの声にはかに多し④

雨降りぬ息づまる如き重き空やがて軽やかになりて風ふく②

雨ふり、みのはしっとりぬれて、野川に人ら塩水選してゐる④

雨降る天城の山の篠原に立てる牡鹿を君見たりてふ

雨ふること十日にして日を見る山上の晴を喜ぶ鶯の声⑩

雨降ると家の中にて羽子つく子眺めて春にしたしくなりぬ⑩

雨ふると牡丹の上に蔽ひたる小傘かくれに赤き花見ゆ①

與謝野晶子

竹尾忠吉

大日方信

結城哀草果

斎藤茂吉

日高為也

水野葉舟

米田雄郎

若山牧水

佐佐木信綱

與謝野晶子

正岡子規

雨降るとまた陽の照るととりどりに寂しからむか病み臥る友⑦

菊池知勇

雨ふるに外に出でむとてせがむ子をすかしあぐみてなげかふわれは③

半田良平

雨降るに似たるやなぎの葉のしとり肩にかかれれば去りがたきかな

金子薫園

雨ふるに日の差しやがてかける道飛鳥は秋の深くなりゐし⑧

高田浪吉

雨降るにやうやく親しみゆくところ耳を搔き酸の湯をばのみつつ②

鹿児島寿蔵

雨ふる野良の青い朝あけ、飯たくことがいやになってしまふ④

米田雄郎

雨降るはいぶせかれども雲動かばたちまち暑く蒸氣立むしけつべし⑨

尾山篤二郎

雨ふる日、所帯じみたるみじめさを、壁の匂ひにふとおもひたり①

岡 稻里

雨ふるもふらぬも櫻栂の花こぼれ重きくもりの霖雨つゆとならむとす

宇都野 研

雨ふるや白骨の溪のみちべなる草の紅葉は時すぎにけり①

大橋 松平

雨降るや水と河原の入りまじりはてなく広き山川にして②⑥

與謝野晶子

雨降るや丘低くして滑らかに畑林などつらなる武蔵②⑩

與謝野晶子

雨

雨

あめ降れど小室の蓬青めれば山莊の馬山羊さむからず②⑥

與謝野晶子

雨降れど寒からぬ今日ききなれぬいろいろの鳥の明るきさへづり④

若山喜志子

雨降れど泰山木の花咲けば夕月夜にもなるこちする②⑧

與謝野晶子

雨ふれど濁りてをらぬ川の水遠くよりうねり来れるいろや⑦

高田浪吉

雨ふれば紅い絞りの手柄などはぎ合はせつつ紐くけこもる

大塚清子

雨ふれば暁山にたかだかと蝸なけり朝ながらわびし

今井邦子

雨降れば雨具をもちて学校に行くらん吾子のおもほゆるかな①

三ヶ島葭子

雨ふれば雨おしながす古道の土洗はれて石あらはなり②

長塚節

雨降れば雨にいだしてはぐくめり咲くべくなりし鉢のぎぼうしゆ

今宮武雄

雨降れば雨にしよぼしよぼ睫毛までぬれて出て入りつわが蝗まろ⑤

若山喜志子

雨降れば雨の秋なり口割りしいちじくの果が雫をたらす

桐田路村

雨降れば雨の他は見ず風吹けばひと日音聞くわが足萎えて

谷口一男

あめふればあめふりうたを口ずさみいでゆく吾子となりにけるかな⑦ 藤田華子

雨ふれば雨漏る家に起き伏していまは成す無し雨を憎みぬ① 中村正爾

雨ふれば青きみ空ぞなつかしきその青空も寂しと思へど 北原白秋

雨ふれば青蘂うづむる山房の朝明の寒さ身にしみにけり② 隅田葉吉

雨ふれば石狩の野は秋や立つ単衣さむけくなりけるかも② 小杉放庵

雨ふれば異人娘のあらはなるかひないとしく濡れゆく銀座① 中村正爾

雨降ればいつか垣根にあらはれてかく繰りかへし死なむ蝸虫か⑥ 松岡貞総

雨降ればいつか木にゐる蛙子よいくに棲みて雨に執せる⑥ 松岡貞総

雨降れば出づることありてふ天城嶺の鹿を君見き梅雨の雨のなかに 若山牧水

雨ふれば、いで湯の湯気のしろじろと、木立のもとをながれゆく見ゆ① 石原純

雨ふれば家に帰らなと泣く子をばなぐさめかねて皆黙しゐる① 築地藤子

雨ふれば梁木うつばりの暗く沈みたる店に居りつつ静けきをよろこぶ③ 中村憲吉

雨

雨

雨ふればおちつくものと元日の町の舗道はぬれゆきにけり⑧

雨降れば大鞍馬嶺の山ふかき嵐気をおもふ石をながめて

雨ふればおほよそころねもごろに濡れてかをりぬ雫するまで

雨降れば隠亡堀のにごり水君が家さしてゆくと悲しき⑧

雨ふればかさなりあひて附きあひて温み保つかあはれ新葉よ⑤

雨降れば幽かに泣けりわがこころ芦のたぐひか萱のたぐひか⑮

雨降れば金具がきしむミシンの上げふの縫もの華やかに積む

雨降れば必ず庭へ一匹の亀が来るなりどこからとなく⑥

雨ふればかの墓原の木も草もぬれそぼつらむ秋のさむさに①

雨降れば川床となるこの道か晒れし礫の歩むになづむ②

雨降れば河に住む魚細溝をつたひのぼると人のおどろき②

雨降れば甲斐絹の機の絹糸のうるめる白に似るかつら川⑳

高田浪吉

吉井勇

北原白秋

吉井勇

尾上柴舟

與謝野晶子

三国玲子

樹下慶蔵

山川柳子

杉田鶴子

正富汪洋

與謝野晶子

雨降れば、機械油のたちこめて、実験室のただにひそまる①
雨降ればきのこのとき傘さしてわが子は小さく見ゆることかな③
雨ふれば桐の梢の相せまり相重りて真青にゆるる

雨ふればくぼみぬかるむ野の路に草をかり敷くひとり来りて⑩
雨降れば厨にあられを炒りて居り春の田に出る小昼にせんと⑥

雨ふれば今日いとまあり札幌の大き通りを下駄はきあゆむ

雨ふれば今宵はじめての寒さあり掌あぶる炭火あらばよけむに⑧

雨ふればさうさうしさよトタン屋根なほ永く住まむこの屋根の下①

雨ふれば早苗とる子はみのを着るみのの下すく赤い帯かな③

雨ふれば寒くありけり春去ると暦に云へど眼には見えぬに⑨

雨ふれば寒さうながす鉢前の山茶花しろく早咲ひとつ⑤

雨ふれば白けし樺も鷹の巢も如何に寒きと山に思ひぬ⑫

雨

石原純	中原綾子	林圭子	土岐善麿	伊藤範勝	古泉千樫	高田浪吉	高田浪吉	小杉放庵	尾山篤二郎	中村憲吉	與謝野寛
-----	------	-----	------	------	------	------	------	------	-------	------	------

雨

雨ふれば外に出づなと子に言ひてわが擦る燐寸は湿りてつかず①

三ヶ島 葭子

雨ふれば戸ざしてともす電灯の下にうるさし夜までも蠅⑦

岡 麓

雨ふれば泊れる船にあるごとく木蔭に濡れて白し我窓⑭

與謝野 寛

雨ふれば土間を出入るは燕のみ酒場の瓶に藤の垂れたり③

中村 憲吉

雨降れば友も来らず心さびしこの休日風呂浴みこもる

結城 哀草果

雨降ればなほなみの音のゆたけしやねむるに惜しき松原のやど

潮 みどり

雨降れば納屋にこもりて一念にわらちをつくる寂しがりつつ①

中村 美穂

雨降ればのそりのそりとひるがへる汝もや思ふ天地の謎①

柳 原 白蓮

雨ふれば八月さむきみちのくの荒山籠り君おはしけむ②

小 杉 放庵

雨降れば鉢の金魚のなまぐさく疎ましきことを思ひぞ我がゐし②

川 島 園子

雨降れば薔薇の若芽のうす紅の色よりあさきよろこびぞくる③

尾 上 柴舟

雨ふれば春ながらさむし、くろずめる桜のみきのわびしくも立ち①

石 原 純

雨ふれば人も見に来ず藤なみの花のながふさいたづらに咲く
 雨降ればふくらむ土に埋もれて大根の二葉見らくすくなき⑬
 雨ふれば豊作と決むる慣ひにて物価一雨ごとにし下る②
 雨降れば上枝しだれて濡縁にその葉とどかず布袋竹の竹
 あめふれば松のこかげにあつまりて池にはうかぶ鴨ぞすくなき
 雨ふれば松間の砂の庭漚ながるなして風吹きかよふ⑧
 雨ふれば水の面や数しれぬ波紋かさなり皺よせにけり①
 雨ふれば身に余る大き傘さして子はいでてゆく母が手離れて③
 雨降ればものも縫ひえず天窓にガラスの板を欲しと思ひぬ①
 雨ふれば宿の軒した日暮れても乗り捨てしまま竝ぶ山鴛籠⑭
 雨降れば山の形のかくろひておちつくと見え胸さわがしき⑧
 雨降れば雪降れば濡るるこの家の浅き軒端のいとしからずや④

雨

伊藤左千夫
 尾上柴舟
 相良義重
 若山牧水
 昭憲皇太后
 尾山篤二郎
 津端修
 小宮良太郎
 三ヶ島葭子
 與謝野寛
 高田浪吉
 岡本かの子

雨

雨ふれば宵早くいぬるわが室の電灯をめぐる蚊の数ふへつ②

雨ふれば、落葉松らくえふしょうの立ち囲む、うみのおもてのしろく霧だつ①

雨ふれば硫氣を含む水ながら愛をしみて飲めりひと息にして

雨降れば わが家の人誰も誰も沈める顔す 雨霽れよかし①

雨降ればわれの若さに寂しさの入りくる門を見るここちする⑬

雨ふれりかく思ひつつしづやかにまたも寝に入る秋ふけし朝①

雨降れりこのなにげなき一言も君より聞けばなつかしきかな②

雨降れり恋のはかなし身のはかなし行末よりも今の唯今⑫

雨ふれり丹のぬれいろの草花にむかひて端居を久しくするも②

雨降れり帆立貝めく長き襷もつ焼岳がけぶり噴きつつ⑳

雨降れる荒磯夜更けて渚べにくづれ来る浪白く走りぬ㉑

雨ふれる伊良湖の崎の砂掘りて少年ら亀の卵をさがす㉒

音馬 実

石原 純

葛原 妙子

石川 啄木

與謝野 晶子

近藤 元

中原 綾子

與謝野 晶子

木下 利玄

與謝野 晶子

相沢 貫一

近藤 秀明

雨ふれる川のおもての青みもつ湖のそこひになるやその川⑧

高田浪吉

雨ふれる枯山櫻春もやくれなるふふみあてにすがしさ

北原白秋

雨ふれる水道橋駅出でて立つ暑くし汗の肌をながるる⑧

高田浪吉

雨ふれる谷間にあふぐ滝の瀬はいたく真白く落ちひびくなり⑥

高田浪吉

雨ふれるたびに兵營の草伸びてわが丈よりも長くなりけり⑤

川口比良男

雨ふれる戸山が原の樹立しづか眺めつつをれば胸せまるなり②

栗原潔子

雨降れる庭は小暗し木の葉より落ちくる雫をりをり光る③

杉浦翠子

雨降れる日暮の街を見おろしてせはしき旅の身をばやすむる①

早川幾忠

雨ふれるままにくれゆく川近み静ころなき明るさに居る

生田蝶介

雨ふれる向う岩面を落ちきたる滝はさやけし川へだたりて

高田浪吉

雨降れるも中にしげく啼き競ふ昼のいとどのこゑをぞききつ⑤

高田浪吉

雨ふれる山を下りて来たりしに河なかの岩青みどろなる①

高田浪吉

雨

雨

雨降れる夜くだちてひとり思ひゐる家移るべきことわづらはし②

高田 浪吉

雨降れる夜庭にとぶは何の蛾か灯明の中をきるとき白し②

平野 宣紀

雨ふれる宵闇なかにとびみだる螢は鞍の上よりも飛ぶ⑤

藤原 哲夫

雨降れる夜ふけいづこより来しならむ馬追虫の啼きてゐるなり

高田 浪吉

雨細う梨ちる寺のうす月夜影か白衣の亡き姉も来る①

茅野 蕭々

雨ほそうふる夜なりけり、なにものか草にまぎれてしくしくとなく①

岡 稻里

雨ほそき破垣ちかくひそひそと田を鋤く人の馬叱るこゑ③

北原 白秋

雨ほそく叡山苔を濡らしぬ君とながむる木屋町の庭⑨

吉井 勇

雨ほそく祇園に飛べるつばくらを見つる夜明に似てこぼれきぬ⑨

與謝野 寛

雨ほそく蓼のしげみに降るみえてその奥の夜に音ひとつなし

平沢進 八郎

雨まさに来らんとしてむしあつし河原をゆきて足つかれたり①

高橋 俊人

雨まじへ風の鳴る空陰惨の灰ちかづきてゐるにあらぬか⑥

宮 柊二

雨またく晴れし水の面の夕照に山松の幹の黄なる明るみ⑧

佐佐木信綱

雨待ちていく日かむなしひたでりに照りつづく後に庭を枯らしぬ③

岡 麓

雨待てる信濃の国の四方の峯のゆふべゆふべを黄雲たなびく

若山牧水

雨まてる窓べに雨のふりて来ぬ今は身を投げやすらかにあらむ

若山牧水

雨三日山にこもればもみぢ葉の色うつろひて行くさまも見つ①

川浪磐根

雨みゆるうき葉しら蓮絵師の君に傘まゐらす三尺の船①

與謝野晶子

雨もたぬ梅雨期の日光ひかりの烈しさよ花瓣つかるる泰山木の花

久保田安治

雨もてる月夜おぼろに水沼なる鳩鳥の声いつまでもあり①

吉植庄亮

雨もなき早の庭の焼土にこがれて立てる撫子の花①

正岡子規

雨もなく寒に入りたるこの冬は餅の黴さへ見ずにしまひぬ④

丹 四郎

雨もはれ雷鳴もやんだ 雲のきれ間から のぞく青空のさわやかな色⑤渡 辺 順 三

雨もふらむ風もやふかむ心すて世すて人すて歌にふけらむか①

丸 岡 桂

雨